

平成6年度村道拡幅工事に伴う発掘調査報告書①

なか こし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1995

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、昭和62年から、西原土地区画整理事業の進行にあわせて調査を実施し、さらに下水道工事や個人住宅が建設される部分についても、発掘調査をし記録保存をはかってきました。本書は、平成6年度に実施した、中央グランド北の道路から北へ延びる村道625号線の拡幅改良工事に伴う発掘調査の記録です。

狭い範囲の調査でしたが、調査によって縄文時代前期の住居址2軒が発見され、前期初頭の集落の北縁の様子や、関西系の土器との関係を知る資料などを得ることができました。

調査に際して、御理解と御協力をいただいた地元や工事関係の皆さんと、狭い現場で苦勞された、宮田村遺跡調査会会長友野良一先生をはじめとする作業にあたられた方々に感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成7年3月15日

宮田村教育委員会

教育長 小林 守

例 言

1. 本書は、平成6年度に実施した、村道625号線拡幅改良工事に伴う中越遺跡の発掘調査報告書（その1）である。
 2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
 3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
 4. 報告書中の遺構実測図や拓影図の縮小率は次のようにしてある。
住居址……1/80 縄文土器拓影図……1/3
 5. 本調査にかかわる記録や図書類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。
-

目 次

序

例 言

I	遺跡の概観と調査の経過	1
1	遺跡の立地	1
2	調査の経過	3
	(1) 調査にいたるまで	
	(2) 調査の組織	
	(3) 調査の経過	
	(4) 遺物の分類について	
II	縄文前期の遺構と遺物	5
	(1) 280号住居址	
	(2) 281号住居址	
III	ま と め	8

I 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある(図1)。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

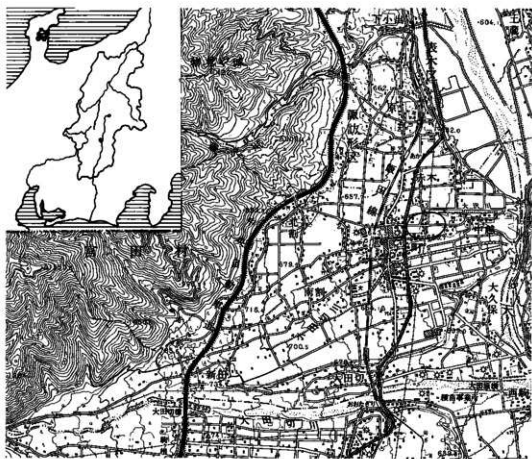


図1 位置図(5万分の1)

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐植土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定されるが、急速な宅地化が進んでいる現在、そのような微地形は地上では見ることができなくなりつつある。遺跡一帯で少し前まで、石積みを立てて畑を平坦に整地した痕が所々に見られており、現地形は、かなり整地された後の姿なのである。

調査地点は台地北縁の一段高い面に相当し、遺跡中央を東西に縦断する中越北線から、遺跡西端近くで北へ向かって伸びる道路部分で、過去の調査で、一帯は北東方向にゆるく傾斜する広い平坦面であったことがわかっていいる。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐植土の深い地点では、黒褐色土の上に黒色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切扇状地を構成する準大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐植土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

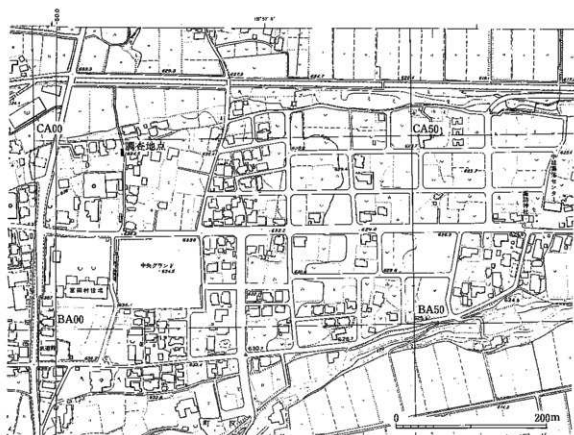


図2 調査地点図(「宮山村平面図」—平成元年12月作成—をもとに作図)

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集落遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。今回の調査地点はそのうちの縄文前期の集落の中の北縁に近い位置ということになる。

2 調査の経過

(1) 調査にいたるまで

本報告の調査は、東西に広い遺跡の西寄りにある、遺跡中央を東西に縦断する中越北線から北へ入っていく村道625号線の、拡幅改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された。村道625号線は、平成3年度に下水道工事に伴う調査が実施され、今回拡幅改良工事される部分も、同じ年に2箇所が調査されており、今回の工事に伴って調査したのは残っていた2箇所の拡幅部分に限った。本書はその2箇所のうちの北端部分の調査報告書である(図2)。遺構等が断片的に残っている既設の道路下は、結果として下水道部分しか調査できなかったわけで、何回も掘り返される道路下の工事に、どのように対処していったらいいか、課題を残してしまった。工事に伴う発掘届は5月12日に提出されている。

当初、平成6年の6月から7月を発掘時期と考えていたのだが、西原土地区画整理事業に伴う調査が9月まで長引き、本工事の着工が秋になるとのことから、引き続いて都市計画道路拡幅工事に伴う調査を先行させ、本報告の調査に入ったのは、10月であった。

(2) 調査の組織

今回の遺跡調査にかかわる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会 長 友野 良一	教育次長 小林 修	小田切守正
委 員 片桐 貞治 (9月まで)	係 長 原 寿	松下 末春
” 平沢 和雄	係 小池 孝	木下 道子
” 青木 三男		酒井 艶子
” 伊東 醇一		林 美弥子
” 唐木 哲郎		
” 加藤 勝美		
” 太田 保 (10月から)		
教育長 小林 守		

(3) 調査の経過

現場における発掘作業と遺物水洗作業は、平成6年10月3日から10月26日までの間に実施した。都市計画道路拡幅に伴う調査に続いて実施したもので、発掘は、用地南に掘り上げた土を置いて進めた。現状が畑となっている調査地は、一度水田として整地されたことがあったようで、50cm程の埋め土の下に、旧表土、黒色土、縄文前期の遺物包含層があり、現地表面から110cm程下の包含層下面で遺構は検出された。

調査によって縄文前期の包含層の下に2軒の住居址が発見され、いずれも掘り上げ、記録を作成して発掘作業は終了した。10月6日のことである。調査面積は約30㎡。調査地点を遺跡地に設定されているグリッドで表わすと、BX11グリッド(図2、3)ということになる。

整理作業は12月から開始したが、作業は今年度実施した西原土地区画整理事業に伴う第14次調査の整理と並行して行なった。

(4) 遺物の分類について

出土した縄文前期の遺物の分類は、土器石器共に「中越遺跡発掘調査報告書」(富田村教育委員会1990)での基準と呼称をそのまま使用している。詳細は上記報告書を見ていただきたいが、I期は中越期に、II期は神ノ木期に相当し、I群とは在地、II群は関東系、III群は東海系の土器をそれぞれ指している。遺跡地には昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく前記報告書による。

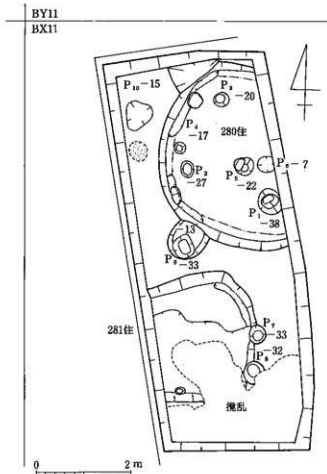


図3 遺構全体図兼280・281号住居址実測図

II 縄文前期の遺構と遺物

(1) 280号住居址

B X11グリッドに検出されたが半分近くが用地外となる。従って平面形等は推定だが、南東方向に軸線を置く、丸みの強い隅丸方形が考えられる(図3)。検出面からの深さは30cm。壁は比較的ゆるく立ち上がる。壁下に周溝があるが、部分的で幅や深さも多様であり、床面が粘土質黄色土によって貼ってあるのに壁下の一定幅にそれが観察されないことから、住居を掘り込んだ時の床を貼る前の状態が、この壁下の掘り上げた姿なのかもしれない。柱穴はP₁~P₃と東の用地外に1本の4本と推定され、P₄を、形態と位置、埋土から少量の炭が出土していることから炉とした。検出面には住居址と重なるようにしていくつかのピットや窪みがあるが、住居址と直接的な関係はなさそうである。西の壁外の包含層下層に焼けた部分が観察された。

遺物はさほど多くない。しかし、ほぼI期I群AのみでBがわずかに混じるという組成の土器は一括資料としてはまとまった量ということができる。一定量のIII群土器と、繊維を含む粗製の土器が伴出している(図5)。特殊なものとして完形の小型無文尖底浅鉢(図4)と焼けた粘土塊がある。小形浅鉢は内外共に赤色顔料で塗彩されている。顔料が観察されるのは全面ではないが、剥落した結果なのか、器面が塗り分けられていたのかは不明である。石器には石鏃10、石錐3、スクレパー4、打製石鏃1、叩石7、打製石斧1と、黒曜石の剥片60、屑片44、石核15、両極打法の痕跡のあるもの10、原石6、硬砂岩の扁平な円礫と小円礫各1が出土しており、簡素な加工の石鏃や磨痕の顕著な叩石が多いことが目につく。

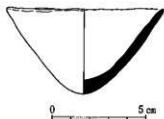


図4 280号住居址出土土器実測図

土器から、前期初頭中越式期の最も古い時期の住居址である。

(2) 281号住居址

同じB X11グリッドで、280号住居址の南に検出された住居址で、西の一部が用地外となる。複数回と思われる攪乱によって南側が大きく破壊されており、壁も大分削られていた。北側で検出面からの深さ40cmを測る。軸線の方法は断定できないが、西もしくは東とだけしておきたい。東の壁直下に周溝がある。床面は北側に粘土質黄色土による荒い貼床が観察され、その面は壁に向かって顕著に高くなっていた。しかし、半分から南は貼床が見いだせず、砂質黄色土の面は北側よりも5cm程度低くなっていた。床が破壊されたものか否かは不明である。東壁に2基のピットがある(P₇、P₈)。床面に柱穴が発見されないことからこれらのピットを柱穴としたい。

遺物はさほど多くない。土器はI期I群が6割、II期I群が4割で少量のIII群と粗製繊維土器

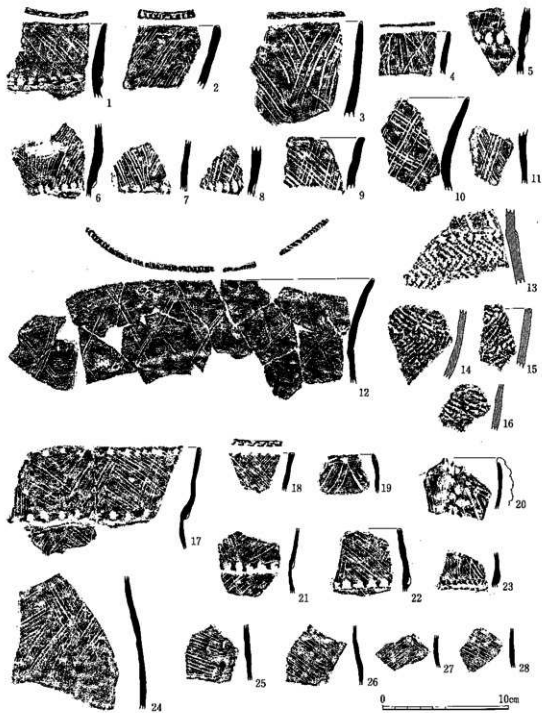


图5 280号住居址出土土器拓影

281号住居址

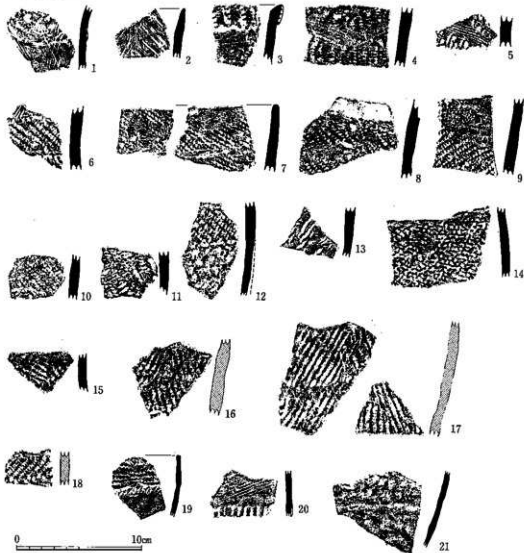


図6 281号住居址出土土器拓影

が伴う(図6)。Ⅰ期Ⅰ群はすべて破片だがAからDもしくはEまでの土器があり、Ⅱ期Ⅰ群は小破片が多いため全容はわからないが単純な斜縄文が主体であろう。石器には石鏃2、石匙1、スクレパー1、叩石2、礫端叩石1、打製石斧1のほか、黒曜石類の剥片25・屑片23・石核15、扁平な円礫と小円礫各1が出土している。スクレパーは石鏃の破片である可能性もある。

前期初頭の住居址に隣接して発見された埋土に一定量のⅡ期の土器が入っている住居址であり所属時期は神ノ木期としておくが、方形の平面形は神ノ木期の特徴であるものの、該期の住居としては規模が小さく、時期を特定することに不安が残る。

関連する遺構を把握することができなかったが、埋土から鉄鏃が出土している。

Ⅲ ま と め

調査地点は中越遺跡の縄文前期の集落の範囲であり、面積が狭かったが、2軒の住居址を発見した。空白だった集落画の一部に色をつけられたわけで、一定の成果を上げた調査といえる。また、耕作や様々な整地によって包含層が動かされている例が多い中越遺跡の中で、今回の調査地点は包含層についてのデータも得ることができた。その分析は今後の課題である。

道路に面した狭い場所の調査で、現場で作業にあられた皆さんは気苦勞もあり大変だったと思う。記して感謝したい。



調査区全景 (南より)



同上 (北より)



280号住居址 (北より)



281号住居址 (南より)

平成6年度村道拡幅工事に伴う発掘調査報告書①

中越遺跡

1995年3月15日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印刷 はおずき書籍館

長野市御原2133-5
